

浄土

monthly
JŌDO

April 2009

4





布施持戒、乃至孝養父母等の
諸行を選捨て、専ら佛号を
称するを選取す。
かるが故に選択というなり



「選択集」第三章

呉丘 富塚善吉・友禅模様師『浄土』2009年表紙の人

明治33年神田区松下町に生まれる。

日本画の小林呉橋に師事。

淀橋区落合に工房を構え多数の弟子を持つ。

戦時中、千葉興津に疎開、戦後も潮風の漂う仕事場で友禅を描き続ける。

昭和52年逝去。

表紙は構図から下絵、糸目糊置、色挿し、仕上げ、金加工まで全工程を
一人で行った逸品。

3月号『花下遊樂園(花宴)』

山形

稱念寺

寺に歴史あり
人々に信仰あり
日本の
心の故郷を紀行する

寺院紀行



三栄山稱念寺本堂と稱念寺第四十三世となる井澤隆明住職。度重なる火災に遭った本堂だが、先代井澤孝瑞住職が現本堂を再建された。

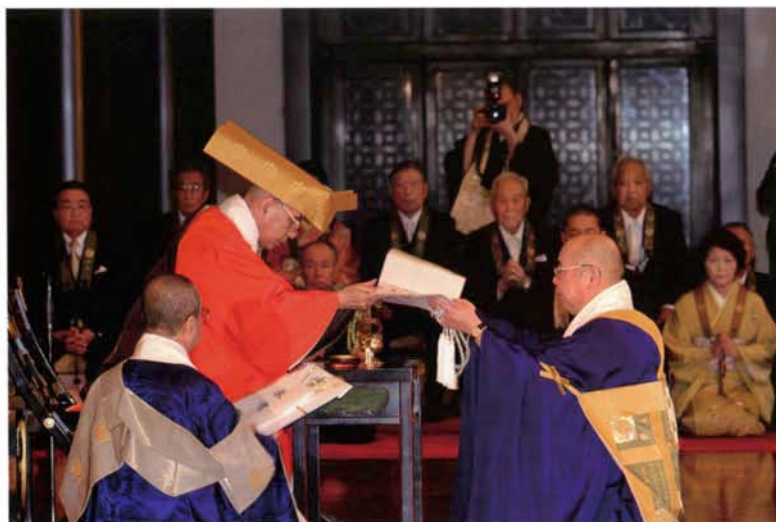


稱念寺本尊阿彌陀如来座像。



仏前には増上寺と増上寺布教師会からの御忌唱導師の祝いの品が供えられていた。

平成21年1月25日、増上寺本尊前での教書伝達式で八木季生台下から教書を受け取る井澤住職。



教書伝達式で法然上人像に向かい礼拝をする井澤住職
(写真中央手前)。



教書伝達式後に檀家総代さんと一緒に記念撮影。前列右から兄になる井澤隆徳本山蓮華寺貫主、真貴子婦人、井澤隆明稱念寺住職、俊彦副住職。



平成十一年晋山記念の自坊稱念寺の五重相伝で受者に灌頂する井澤住職。



本堂後方の位牌堂。位牌堂の裏のスペースは地元の子供会や老人会の集
合場所になっているという。

浄土

2009/4月号 目次

カラーグラビア寺院紀行 山形 称念寺	撮影=タカオカ邦彦	1
法然上人への思慕	岡本かの子	6
寺院紀行 山形 称念寺	真山 剛	12
小説快僧渡辺海旭『壺中に月を求めて③』	前田和男	20
会いたい人 山崎努さん①	関 容子	26
響流十方	林田康順	34
朝めし礼賛	麻生タオ	38
江戸を歩く 第二十五回	森 清鑑	40
浄土誌上句会	選者=増田河郎子	48
マンガ さっちゃんはネッ	かまちよろう	51
編集後記		52

教えと法話

生野善應



表紙題字=中村康隆前浄土門主
アートディレクション=近藤十四郎
協力=迦陵頻伽舎

浄土誌上
ライブラリ

昭和十年五月「浄土」創刊号掲載



法然上人への 思慕

岡本かの子

私は近頃、紫式部の信仰を調べる必要があつて平安朝の浄土思想を探つてみた。この偉大な女流文学者は晩年阿弥陀仏の信仰により安心立命を得て西方往生を期した。その事は式部自身、日記の中に記してあるから間違ひはなく、且、晩年のみならずずっと前から浄土思想に深く涵養くわんようされるところがあつたために、あの絶美な芸術的情緒が潤うるはされたであらうことも亦、想到するに難くはない。

ところで式部の信仰の環境をなす当時の仏教界の有様をみると思ひの外に浄土教の勢力が強い。しかし其の勢力の強さといふものは形式的や教権的でなく、実質的、内容的である。

つまり日常生活の利益や靈驗は他教によつて需もとめるが、いざ生死といふ人生の根本問題に触れて来ると多く弥陀の西方浄土を念ずるといふ有様だつた。それ故今から見ると随分妙に思はれる信仰様式が行はれてゐた。例へば法華經を受持する功德によつて弥陀の浄土を期するとか、或は釈迦、薬師の造像起立の報勲によつて極樂往生を適かなへさして貰ふとか、およそ筋違ひ、矛盾に感ぜられることが、普通に行はれてゐたやうだつた。つまり専修の念仏でなかつた。そういう複雑修しゆのやり方でも兎に角、弥陀憧憬とうけいの風は滔々として人々の精神界に流れ、世に時めく儀礼仏法、社交仏法の影を避けて、真摯な花を咲かせてゐた。

当時「聖」と称される一群の遁世者があり、遁世する事を「聖ひじる」といふ流行語が出来た程で、世人から羨望の眼を以つて見られてゐたのは心の趣くま、に此の真摯な花が培へる境遇だつたからである。しかしそういう聖たちでも雑修の風は同じ事で、これはもう少し後の事ではあるが、「棚原聖」といふ人の如きは經典も誦せず仏号も唱へず、ただ西に向つて方丈に坐つて居る、それが極樂往生の近道だとするやうな變つたのがあつた。

平安初期以来、浄土教は内容的にそれほど人々の心に強く流れた大きな川であつたとは言へ、その信仰は上述の如き雑修の混濁を帯び、かつ、いくつかの宗派に分れて煩瑣、疎荒に堪えなかつた。それを念仏一行、口誦専修の河容に改漑、統一せられた法然上人の宗教的力量は推し測られないほど偉大なものである。

私たちは上人の垂訓を読み、余りにしばしば口を極めて雑修の排除に努められてゐるのをみて、これ程にせられずともと思ふことがある。しかし、これは浄土思想と念仏との關係が既に整理し尽され、殆ど自明の理の如き形にして与へられてゐる。今時の私達が感ずる感想であつて、上人時代、既往三百余年の雑修の因習の深さの前に立つならば此の感は絶対に起らないであらう。実に當時に於て此の事業をせられたのは、大河の流れを一臂の力に依つて決せられたやうな大努力であつたのである。私は平安朝の浄土教の状態を知るに及んでつくづく上人の思想的勇姿を思ひ泛べた。

次に私が法然上人に感謝してゐることは、上人の迷ひの間が長く思想を定められて立宗開教せられたのは、早熟早老の習慣があつた當時に於ては、寧ろ老年に数へらるゝ、四十歳以上の時であつたことである。上人は長寿で八十歳以上までも在世され立宗開教以来、普通人の一生涯に値する歳月を用ゐられて、あれだけの救世済民をせられたのであるが、若しも上人にして日本人の平均年齢ほどで示寂されたなら甚だ心元ないものがあつたであらう。長寿それ自体、上人の大器晩成を証するものであるが、上人は幼時から慧悟、天才型の方でありながら、而かも四十過ぎまで宗教的求道搜索に彷徨せられたといふ事は、如何にその志が高く、いゝ加減なものでは満足せられない性質であつたことを証する。真の意味の大器晩成型であられた。これにつけて自分の事を言ふのはおかしいやうだけれども、

私も宗教に歩みを入れてから、真の安心立命を得られず、あれやこれやと随分右往左往した。その為め意外な広さを漁つたことは望外の僥倖であるが、しかし「さすらひ」は辛いものである。まして、精神的生命の死活問題に係る「さすらひ」は骨身にこたへる。私は嘆きのあまり、自暴自棄に陥らうとし、懷疑の谷にうづくまり宗教を白眼視しやうとした事さへあつた。そういふときに慰められたのは法然上人の決定の遅かつた事である。(余の大宗教家の決定は多く二十代、三十代であつた。)

「上人の如き慧悟の方にして四十以上まで選択に時日を費された。まして、まだ若く且つ拙い自分である。努むべきである」と、私は思つた。

かういふ意味で感謝されたといふ事を若し上人が聴かれたなら、恐らく苦笑され憫笑されるであらう。しかし、事実私は此の点でどのくらゐ慰められたか知れない。しかも今、私は何人にも早く安心決定して上人の斯る点に慰められずに、もつと上人の本筋の宗教的なものに慰められん事を祈つて止まない。

上人が宗教家として中に鋭く強いものを藏しながら人間としての手触りが春の海の如く寛いでのびやかなのは、私が他でしばしば述べたところである。氣品があつて美的情操の豊であつたことは詠ぜられた和歌によつても判るが、上人の文そのものが既に一個の平明な散文詩である。私はごく卑近な世俗的の疑ひの問ひに對し、同じく卑近な列に降つて通俗に答へられてゐる上人の問答体のものに却つて驚くべき雄勁で艶美な詩のリズムを発見して讚嘆措く能はないのである。淳美の人は何物をも醇化せずには措かない。

私は善き意味の厭世感^{ニヒル感}は現実生活の墮落を批判し、思想の低劣を排除して、良好の理想を迎へ入れる精神的準備工作をなすものと思つてゐる。勿論、上人の宗教は一方、光明主

古き伝統技

三代にわたる信頼

浄土宗法衣専門

有限社

古島法衣店

〒111 東京都台東区元浅草4の2の1

電話(03)384211289
振替00180245231

義ではあるが、一方かなり此の準備工作にも力を入れられてゐる。今日、上人の光明方面と共に、後者の方面にも学ぶべきものが多々あるやうに思ふ。

上人は行業積るにつれ、三昧さんまいを発得はつとくせられ、宝樹、宝池を、眼前に眺められ、大地は瑠璃に化して眺められたと伝記に書いてある。この事は別に信心獲得に直接関係なく、或は伝記者の迷信とする人が在るかも知れないが、私は素直に享け入れ度く思ふ。要するに心、清浄を得た人は現実をも美化して眺められる。否、現実とは本質的には真にして美なのかも知れない。それは兎に角、いやくも浄土思想を愛するものは、その要素の一つとなつて居る美の価値、憧憬の価値にも重要な注意を払ふべきものと思ふ。

詩一つ

佐藤春夫

昭和十年五月『浄土』創刊号掲載
誌上ライブ러리

うらやましきは人ならず

西方の賓地にありて

あそぶてふ鴛鴦なれや

鳥の身もうへ

妙法をぞ説けりける

南無阿彌陀佛

Book

ことわざで学ぶ仏教

本誌に縁の深い勝崎裕彦師（大正大学教授）の新著。
「釈迦に説法」「知らぬが仏」「三人寄れば文殊の智慧」
「渡る世間に鬼はない」「嘘も方便」などなど仏教から
発した言葉であることがすぐ分るものと、おや、これも
仏教に関することであったかと首をかしげるさまざま
な「ことわざ」が丁寧に解説された、一種の仏教入門
書です。（編集部）

ことわざで学ぶ仏教

勝崎裕彦



NHK出版
生活人新書

NHK出版 生活人新書
740円＋税

寺院紀行

山形

稱念寺

撮影／タカオカ邦彦

文／真山剛



平成21年1月25日、大本山増上寺本堂での教書伝達式。
井澤住職は手前左から二人目。

浄土宗には全国で一つの総本山と七つの大本山があり、西の代表は京都・東山の総本山知恩院、東の代表は東京・芝公園の大本山増上寺だといふ。これは伝法といつて浄土宗僧侶の資格を与える権限をこの二つの総大本山が持っているからだそうである。

その増上寺の法主（大本山では住職をこう呼ぶ）に新しく東京都文京区千石の一行院住職、八木季生上人が就任され、三月にその晋山式が行われた。

さて、増上寺第八十八世となる八木台下のお寺、一行院をご記憶だろうか？ 二年前にやはりこの『浄土』寺院紀行で訪れている。本誌と同じ四月号で、一行院住職の八木台下が増上寺御忌の唱導師を勤められ、当時の増上寺法主成田有恒台下から弘子（毛がなびく扇子のような法具）を受け、見事に大役を果たされた時である。

その八木台下が立場を変え、今度は法主として唱導師に弘子を渡されることになった。そして四月五日、八木台下が最初に弘子を渡される唱導師が今回訪れた山形・稱念寺の井澤隆明住職である。

その井澤住職、八木台下との縁は大分昔に遡る。

「もう二十年ぐらい前のことになりましたかね、山形の方で布教師会の集まりがあったのですが、その時に井澤上人が司会をされましてね。その司会がとてもお上手だったんです。そこで増上寺の御忌の司式（司会のこと）をお願い致しました。また、それが縁で山形の



平成11年、井澤住職の晋山記念五重相伝が行なわれた。当時一行院住職だった八木台下が勸戒をされた。記念写真の前列右から眞貴子夫人、井澤隆徳本山蓮華寺眞主、井澤隆明住職、八木季生台下。

井澤上人のお寺にも招かれましてね、五重相伝ごじゅうそうでんの勸戒かんかいをさせていた
だきました。三百人も入れる本堂が受者で一杯になり、モニターの
設置された客殿にも大勢入られていました。まあ、その受者の多い
のに驚いたのを今でも覚えています」

お忙しい中、八木台下にお話を伺えたのだが、台下が井澤上人の
司会での言葉の運び方を気に入られたわけだ。ここで布教師会を説
明しよう。

布教師会は浄土宗僧侶で法話を専門分野とし、全国の浄土宗寺院
で法話をされる僧侶の組織で、八木台下は増上寺布教師会の会長ま
で勤められ、井澤住職は現在、増上寺布教師会の副会長を勤められ
ている。お二人の最初の接点がこの布教師会ということだ。

さて、布教というのはお釈迦さまや法然上人の教えを伝える法話
や講話をすることで、信者を増やしたり信仰を深めるためのものだ。
そして、この布教を専門にする布教師にとって一つの大きな目標が
五重相伝あるいは授戒会の勸戒師を務めることだそう。

布教師会の重鎮だった八木台下は井澤住職の稱念寺はもちろん、
全国各地で五重相伝や授戒会の勸戒師を務めてこられている。

五重相伝とは何か？すでに五重相伝を受けられた読者もいらっ
しゃるかもしれないが、五重相伝とは私たちが浄土宗の教えの真髄
を五つの書物に則り教わるもので、通常五日間で伝えてもらい、最

稱念寺境内を望む。左手松の後方が
本堂で正面が客殿庫裡。



後に浄土宗の教えを身につけた証として、浄土宗でしか使わないという「誓」の文字が入った法号(戒名)をいただくものだそうだ。

もともと戒名とは仏の弟子になった証の名であり、生きているうちに仏の戒めを守ると約束することで授けてもらえるものだそうだが、最近は亡くなってから貰うことが多いのに、高いと安いとか戒名本来の意味そちのけで金額のことばかりが話題になるという。

話を戻そう。つまり五重相伝とは、お寺にとっては檀家さんや信徒さんが仏弟子になり、より信仰を深めてくれることであり、檀家さんや信徒さんにとっては、阿弥陀さまとの縁をいただき、よりよく生きる指針をいただくことになる。五重相伝は寺院にも檀信徒にも意味深い、浄土宗にとっても大切なものなのである。

そして、この五重相伝で浄土宗の教えの真髄を伝える役目を果たすのが勧戒師なのである。

あるお寺で五重相伝の日程表を見せてもらった。五日間に勧戒と書いてあるコマが十二コマもあった。一コマに七十分と記してある、そう七十分授業だ。それを全部たすと、なんと九時間になる。

八木台下が豊富な経験からこう説明して下さった。

「五重相伝での勧戒師さんの話は決められた書物の内容をお伝えする点では、誰が話しても変わりません。ですが、数日間にわたり何時間も話す訳ですから、自ずとその勧戒師さんの個性や特徴が出て

稱念寺の墓所。一村一か寺の伝統がいまも残っていて檀家さんはほとんどが長町町の皆さんだ。



きます。人というのはその生き方が話や顔に出ますのでね。

ですから、浄土宗の教えと、それを伝える勸戒師の魅力、この二つが揃ってこそ受者の皆さんに自然と教えが染み込んでいくのです」なるほど、話や言葉にはその人の生き方が見えてくる。

増上寺布教師会の副会長になられている井澤住職もすでに五重相伝で勸戒師を何度も勤められているが、きくと三年後の平成二十四年まで予定が入っているという。そう、魅力ある布教師なのである。

その井澤住職、今回の唱導師記念に小冊子を引き物にされるという「法然上人と私」と題する、住職が書かれた原稿で、本誌『浄土』の平成十六年十月号の巻頭を飾ったものである。その冒頭に大正大学時代の講演部時代の話が出てくる。全国の浄土宗寺院を巡り、学生ながら法話をさせてもらった夏休みの伝道旅行の懐かしい思い出だ。

「私は若い頃から布教に携わり、『教団は布教が命』と思っているのですが、こうして縁に恵まれ大本山の御忌で唱導師を務めさせていただけににあたっては、一住職として、そして一布教師として法然上人への報恩謝徳の気持ちであらわしたい、と思っています」

力強くこう語る井澤住職は昭和二十四年に稱念寺で生まれた。二人の姉とすぐ上の兄との四人兄弟の末っ子だ。稱念寺の本寺にあり、山形を代表する天童の佛向寺の住職から滋賀の本山蓮華寺の貫主になられた兄とともに僧侶になった。大正大学卒業後、日本大学

山形駅から二つ目羽前千歳駅。遠くに東北の山々が連なっている。稱念寺から歩いて3〜4分だ。



山形高校で社会科を教えていたが、父が佛向寺の住職になったあと、稱念寺を護っていた叔父の体調が崩れたことで寺に戻る。平成五年には住職に就任し、その前後には教誨師、保護司にもなっている。そして、翌六年には庫裡が完成、七年には落慶式と晋山式を、十一年には晋山記念の五重相伝を開延されている。その時に稱念寺に來られ、受者の数に驚いたのが八木台下ということなのだ。

井澤住職が振り返る。

「その時は晋山記念ということもあり、受者が八百人という五重相伝でしたから、八木台下が驚かれたのも当然です。この辺りは一村一か寺が残っていて、稱念寺は『長町の寺』なのです。一昔前は寺の周り一面が田んぼで、檀家さんは全員農家でしたが、みなさんお寺を大事にしてくれて、それこそ町あげての五重相伝でしたね」

短時間の取材中も檀家さんが三組訪ねてきて、親しげに住職とお話をされていた。みんなのお寺なのである。その稱念寺は山形駅からJR奥羽本線で北へ向かい、山形名物の芋煮の会場となる馬見ヶ崎川の河川敷を越えた二つ目の駅、羽前千歳駅の近くにある。

左右の立派な松に挟まれる山門は旧国道十三号線に面しているが、その山門に稱念寺の歴史を辿る紋が刻まれている。

「山門の紋、気付かれましたか。寺紋は笹竜胆なのですが、これは時宗一向派を意味しています。昭和十七年に近隣の一向派寺院五十



旧国道13号線。左手の石垣が稱念寺。

七か寺が浄土宗に移ったのですが、それまでは時宗の寺でした」

時宗一向派とは聞いたことがない。時宗は一遍上人が開いた踊り念仏、と知っていれば十分常識人だとは思うのだが……。

「もともと時宗は一遍上人の時衆、一向俊聖上人の一向衆など、十二の派があったのですが、一向衆は浄土宗の白幡派（しっぽんはたは）伝法を受け継いでいて浄土宗に近かったのです。時宗の各衆各派はその時々、の宗教政策に翻弄され続けてきましたが、一向派はようやく戦争中に浄土宗に合併したと理解していただければ結構です」

少し調べてみると、一向上人も一遍上人も同じ暦仁二年（一二三九）の生まれで、どちらも法然上人の称名念仏を継承した踊り念仏で広く庶民を教化している。ただ、同時代を生きながら二人は一度も会ったことはなかったようだ。

その一向上人の一向衆には、さらに一向派と天童派とあるようだが、時宗の話はこの辺にしておこう。

実は取材が決まってから、井澤住職は浄土宗の役員である総長公室長という大役に就かれた。もともと山形県から一人という浄土宗議会議員を務められており、一期四年過ぎての今春の就任だった。総長公室長とは総理大臣にあたる浄土宗宗務総長に寄り添う、いわば官房長官のようなもので、京都の宗務庁がその職場になる。

「月曜日から金曜日は京都、土日は山形でお寺の仕事です。十三年

道路に面する山門には時宗一向派の笹電胆の紋が彫られている。



続けて県保連常務理事にもなった保護司はもう辞めさせてもらいました。でも、教誨師は日程調整がきくのでまだ続けるつもりです」
新幹線を乗り継いでの京都通いは大変だろうが、山形刑務所での教誨の仕事はまだ続けられるという、話をされることが本当に好きなのだ。

同じ教誨師仲間の宮城の浄土宗僧侶に話が聞けた。

「井澤先生は先輩にあたりますが、禪宗の先生の中には囚人を厳しく諭す先生もいますが、井澤先生は諭すというより囚人に寄り添う話をされます。穏やかで優しい人柄が出ています。また、布教師としての井澤先生の後姿を見て布教師を目指す若手僧侶も少なくありません。変な言い方ですが、井澤先生に真ん中にいてもらうと何でも丸く納まるのです」

若い頃から持ち続けた法然上人への想い、そしてその法然上人の教えを広げる布教への情熱、井澤住職にとって御忌唱導師は特別なものである。八木台下に見込まれ御忌の司式を二十年続けた井澤上人、今度は唱導師として司式に紹介されることになり、八木台下から私子を受け取ることになった。

法然上人への想いがさらにどうふくらむのか、そして布教活動がどう展開するのか。とても楽しみに思う檀信徒さんや関係者は多いだろう。

(ルポライター)



一向俊聖上人像。稱念寺はこの上人の流れを汲む寺である。

小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第三回

相馬黒光との
出会いと別れ 其の三



渡辺海旭の祥月命日には、相馬黒光の自宅に「道友」たちが集っては海旭を偲んだものだ。そのときはきまって、海旭の号にちなんだ中村屋銘菓「壺月羊羹」が供された。その集まりも戦火が激しくなってきたからは途絶え、そのままになってしまった。

黒光は七十五歳をすぎてからときたま霞むようになった頭をふって、想念をひねりだした。いったい私と海旭先生とはいかなる縁だったのか。

「偉大なる父親」

という言葉が浮かんだ。たしかに海旭とは黒光の偉大なる父親だった。そして、その偉大なる父親海旭は黒光と出会って八年で逝ってしまった。あまりにも偉大すぎたため、代わりの父親はついにみつからなかった。おかげで黒光はひとり立ちできたのかもしれない。黒光自身が父親になることと引き換えに。思えば、相馬一家のなかで、生涯の伴侶・愛

蔵はむしろ母親役で、父親を演じてきたのは黒光のほうだった。

黒光は壺月の残りの半かけをほおぼり、茶を一口すすると、独りごちた。

先生に早々と逝かれたおかげで、私は「強い父親」になり、つらい戦中をしつかり生き抜くことができましたのよ。ほめてくださいな。

長女の俊子が夫のボースと二人の子供を残して二十六歳で逝ってしまったときは逆縁にすっかり落ち込んで、海旭に出会ってなんとか立ち直った黒光だったが、満州某重大事件の発生から数えると十余年にわたる戦争で、さらに三つもの逆縁を体験する憂き目にあった。

五男の虎雄は市谷刑務所を出所後医者となったが、軍医として召集され満州で消息不明。俊子とボースの間にできた長男正秀は沖繩戦で戦死。さらにその正秀の子、幼孫の徹を戦

災で亡くした。

彼らは黒光が頭山の影響をうけて賛美してやまなかった「聖戦」によって命を落としたのだった。論を極めれば、子と孫の死の責任の一端は母であり祖母である黒光が負わなければならぬ。それは黒光にとって、たんなる逆縁を越えた超ど級の苦しみだったろう。

戦争が終わっても艱難が待ち受けていた。新宿に戻ってみたら、高野果物店から三越にかけて駅の東口界隈は、尾津組というテキヤに仕切られて、焼けトタンや廃材で小屋がけされた巨大な闇マーケット街ができあがっていた。その中に中村屋の敷地も含まれていた。黒光は夫とともに敢然と立ち上がった。あのときも黒光の中で、義侠心がむらむらと首をもたげたのだった。

土地を不法占拠されながら及び腰の被害者を鼓舞して裁判を起こし、昭和二十三年には勝訴したのだが、あのコワモテの無法者たち

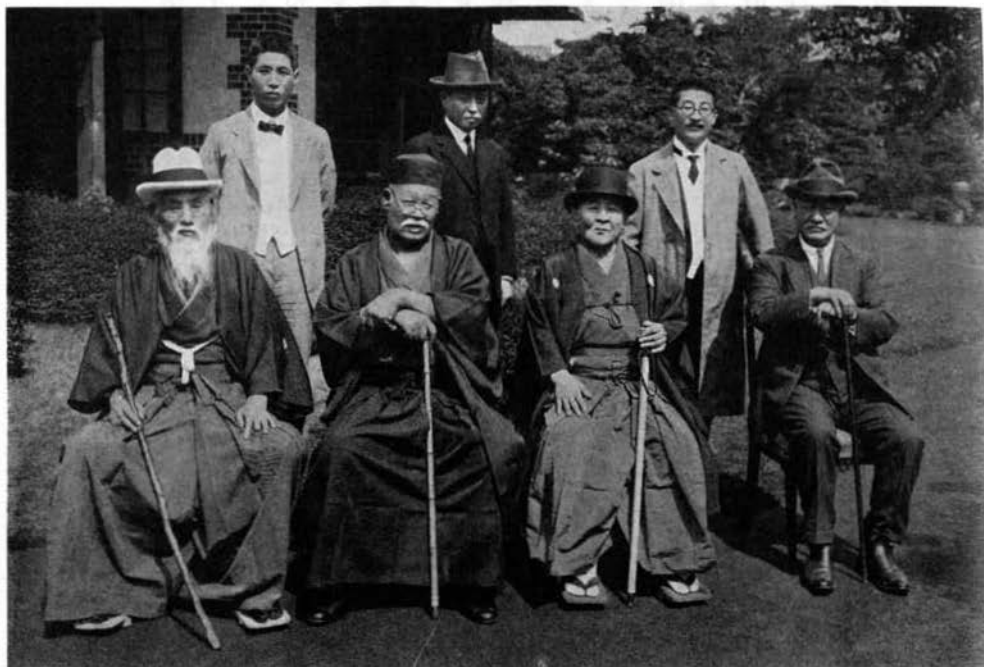
ときたらさっぱり立ち退かない。実質的に土地を取り戻せたのは、昭和二十九年だった。その心労のせいかな、夫の愛蔵はその年に逝ってしまった。

よくもまああんな連中と七年も八年もわたりあえたものだ。

度重なる逆縁と戦後の再興事業の艱難。黒光がそれらを乗り越えることができたのは、逆説的だが、海旭を早く失ったからかもしれない。

*

ところで海旭先生……と黒光の胸中にそれまで思ってもみなかった疑問がわきでてきた。先生と出会ったとき私はいくつ？ たしか五十半ばを過ぎていた。それも長女・俊子を失ったショックで一夜で髪の毛が白くなり、見た目には六十すぎのおばあさんだった。もし今日のラジオ番組で紹介されていた稚氣あふれる先生の留学時代に会っていたら、どうだ



大正五年六月三日 日本士館に於て 前列右より徳富蘇峰氏・故譚一氏・故野田卯太郎氏・山頭滿氏・後列徳田次郎氏 七人

ったかしら。

海旭が留学していたのは明治三十三年から四十三年の十一年間。ということは、海旭が帰国した年に、黒光にとって生涯忘れられないあの事件が起きたのだった。

アトリエを提供したりモデルを買ってでたりして黒光が面倒をみていた彫刻家・萩原守衛が突然逝ってしまったのだ。ときに守衛三十二歳、黒光は三十五歳の女盛り。守衛は黒光に心を寄せ、高村光太郎に「我心に病を得て甚だ重し」と手紙で訴えていた。

ちょうど夫と守衛と三人で卓袱台を囲んで雑談中だった。突然守衛が咯血して倒れた。黒光は部屋中に飛び散った血を見て失神した。そのシーンが突然よみがえって、一瞬、黒光は頭の中が白くなり意識を失いかけた。

守衛の死はスキヤンダルとなり、高村光太郎からは、「病死であろうと自殺であろうと、みんなあの女がからんでのことだ。死因は脳

梅毒だ。うつしたのは黒光だ」とまで言われたものだった。ああ、なんてひどい言いがかりだろう。海旭は帰国しており相談をしようと思えばできた。

いや、それ以前に守衛はバリへ修行に行っていたのだから、守衛を追って留学中の海旭にあうことだってできた。そうしたら、あれは何だったかしら。そうそう、「出山の如來にビールを捧げばや」だった。あの乾杯の仲間に私も加われたかもしれない。

海旭がベートーベンやオペラに造詣があることもついぞ知らなかった。大正・昭和を代表するに芸術家のパトロンを任じてきた黒光としては、海旭とベートーベンやオペラの話もしてみたかった。

偉大なる父親を海旭に求めすぎたのではないだろうか。海旭の一部、それも晩年の一部しか知らずに、師として仰いでいたのはいか。それは海旭との関係をむしろ貧しくし

たのではないか。

こう思いなおしてみると、黒光のなかで海旭という存在は二倍にも三倍にも大きくふくらんでくるのだった。

いったい先生ってどんな人だったのかしら、もっと早くに出会ってみたかった。

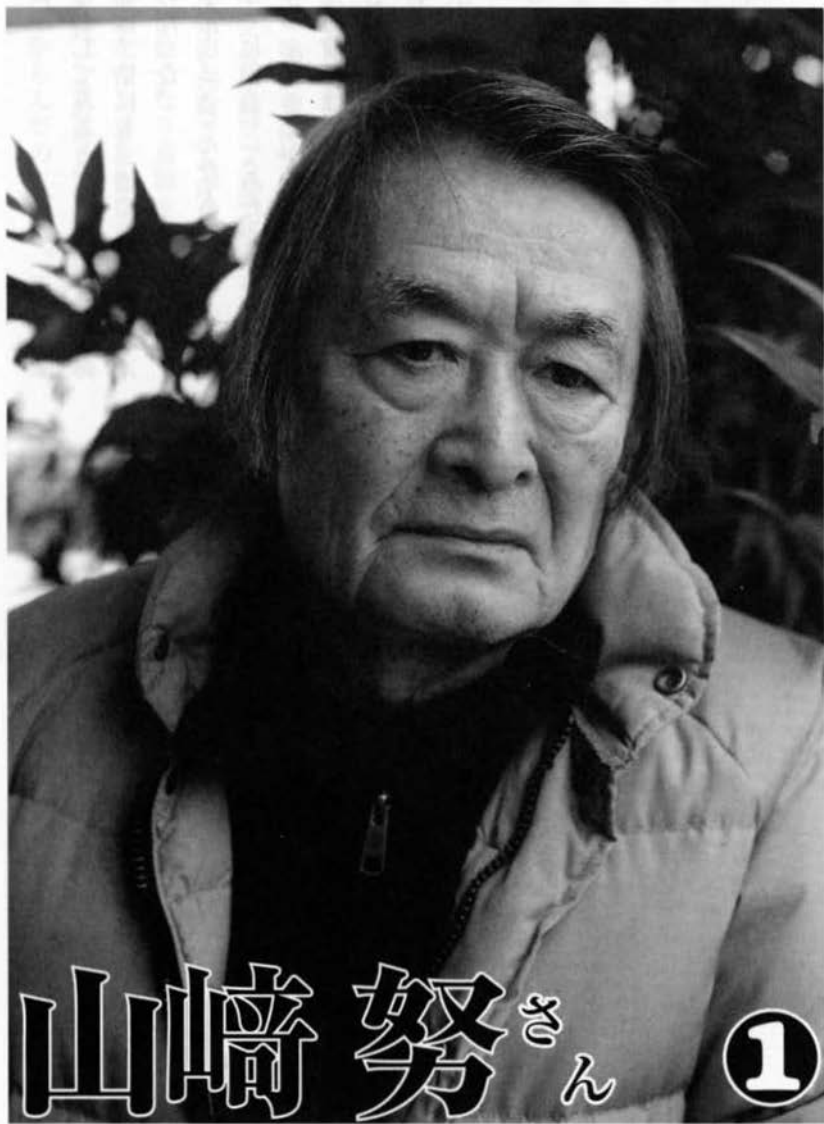
黒光はそうつぶやきながらまどろみはじめていた。黒光の前には食べさしの壺月羊羹の半かけが残され、そこにはまるで少女のような可愛らしい歯型が刻まれていた。(つづく)

●前田和男 プロフィール

1947年東京生まれ。渡辺海旭の母校であり校長をつとめた芝中・芝高60期。東京大学農学部卒。翻訳家、ノンフィクション作家、編集者。路上観察学会事務局。資生堂化粧文化研究会会員。著作：『MG5物語』（求龍堂）『足元の革命』（新潮新書）など。訳書：I・ベルイマン『ある結婚の風景』（ヘラルド出版）など。

連載

会いたい人 関 容子



山崎 努さん

①

撮影／タカオカ邦彦

山崎さんがベテラン納棺師の役で出ている映画『おくりびと』がアカデミー外国語映画賞を受賞したり、最近また放映された黒沢明の『天国と地獄』で誘拐犯の医学生役を演じた若い彼が二ヒルで素敵、と私の後輩たちが騒いだり、とかく映像での話題が多いけれど、山崎さんはれっきとした舞台出身の俳優。

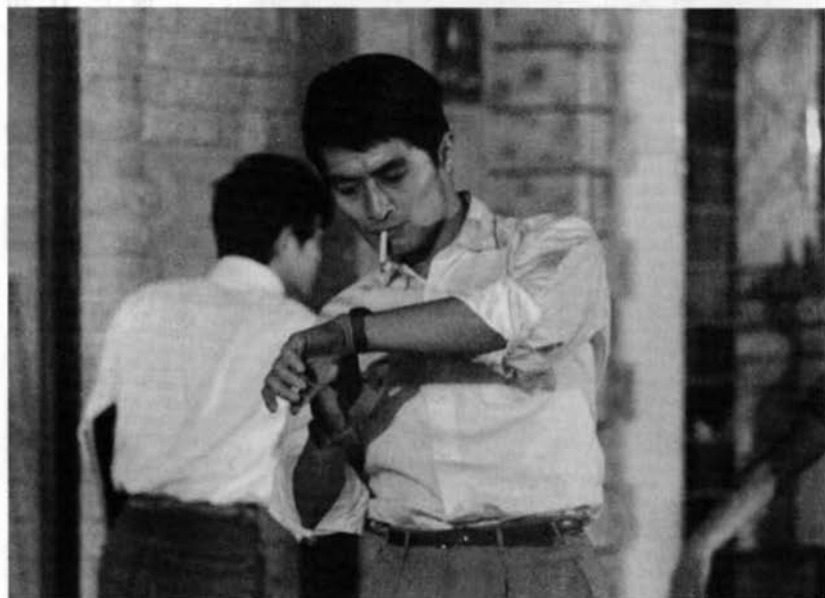
俳優座養成所の研修生だったころの舞台を文学座の人気俳優芥川比呂志が見て山崎さんに目がとまり、文学座へ引っ張ったのだ、という話をいつか聞いた。「文学座史」によると、これは昭和三十二年の暮れ、新劇合同公演の『寂しき人々』（ハウプトマン）に山崎さんが鉄道大夫の役で出たときのことだろう。私はこの芝居を俳優座劇場で観たのだが、でも「鉄道大夫」にはおぼえがない。

その後昭和三十五年の文学座公演、三島由紀夫の『熱帯樹』でデヴィューした山崎さんを第一生命ホールで観ている。共演の杉村春子、三津田健、加藤治子などの間で、若いのちに

よつと偉そうに構えていて、でも中味は純粹で、都市的、という感じだったのが印象に残っている。

ところで山崎さんの人物、風貌を紹介するのに「深く刻まれた眉間のシワとムスツとした表情、低い声、独特の存在感、威圧感」というのがお定まりらしく、近寄りがたい気がして、その舞台や映像を眺めて感心しているだけにとどめていた。でも会ってお話を聞きたいと思ったのは「週刊文春」の「読書日記」欄で、逃亡者の話、逃げまわる男の話が好きで、『笹まぐら』（丸谷才一著、徴兵忌避の青年の話）などは何回も読み直している、という文章にふれたことによる。

それで私がときどき協力している毎日新聞書評欄の、各界で一流の人に「好きなもの」を三つ言ってもらおうというコラムの取材を申し込むと、「では午後に、恵比寿のウエスティン・ホテルのバー・ラウンジで」と、場所を指定された。



「天国と地獄」での山崎努さん。46年前の作品だ。

©1963 TOHO CO.,LTD

当日、このあたりは丸谷才一さんの散歩コースなのでもしかして、という予感があったが、やはりロビーでその姿を見かけ、今、山崎さんの取材中ですと言うと、「ではちよつと挨拶を」(丸谷さんはかねて山崎さんびいきと聞いていた)ということになった。

山崎さんの「好きなもの」は、①草野球、②名作の再読、③ビールで、丸谷さんとの邂逅のときはビールもかなりすすんでいたが二人はすぐに打ちとけ、まず丸谷さんが『笹まくら』愛読のお礼を述べると、

「いやあ、ぼくがもつと若かったら、映画であの主人公をやらせていただきたかったですよ。あの作品が映画になってないのが不思議です」

「そうおっしゃっていただと非常に嬉しい。実は和田誠さんがこれは映画にいい、と思ったそうなんです、ロケとか時代考証に金がかかりそうだ、って(笑)。しかし戦後の話のところは山崎さんにびつたりだけどな

あ

「今、枕元に置いて再読し始めたのは先生の訳でグレアム・グリーンの『ブライトン・ロツク』です。追う者と追われる者の話がなぜ好きで……」

山崎さんはこの出遭いの偶然性がまだ信じられない、といった面もちで、話しながらますます丸谷さんを見つめる。その眼差しを見ていたら、いつの間にか渋い演技派のベテランが『熱帯樹』で初舞台を踏んだあの若者に戻っていた。

丸谷さんはビールの勘定を払い、旧交のあった芥川比呂志の話なども聞きたいからと、後日三人でのディナーの約束をして、その日は別れた。

再会の場所は銀座の資生堂。まず山崎さんが年齢の話から入る。

「芥川さんはほんと十七違いますから、大正九年生まれでしたか。たしか三船敏郎さんと

同い年です」

山崎さんが三船敏郎と『天国と地獄』や『赤ひげ』で共演した話を聞きたかったが、それはあとまわしにする。

「ぼくは大正十四年生まれだから、芥川さんはぼくよりそんなに上だったかなあ」

と、丸谷さん。芥川比呂志と丸谷さんが親しく話すようになったのは、昭和四十三年に『年の残り』で芥川賞を受賞して以来のことだそう。丸谷さんが続ける。

「芥川さんの舞台は加藤道夫の『挿話』^{エピソード}（昭和二十四年）を三越劇場で観たのが最初でしたけど、この役者で日本の演劇は変る、という気がしましたね」

残念ながらそれは観ていないが、その後芥川と演出家福田恒存の名を一躍高めたのが『ハムレット』。昭和三十年四月、名古屋で初演され、翌年一月の東横ホールで東京初演。

丸谷さんと山崎さんの話が弾む。

丸谷 「ぼくはいろんな人のハムレットを観

たけれど、本を読みながら歩いてる姿が芥川さんほどぴたりくる知的な役者はほかにいませんでした。芥川さんが本を手にすると、それがラテン語の本だつてことがわかる。ほかの役者だと、日本語の本になつてしまう（笑）。福田恒存がああ演出はイギリスで観た『ハムレット』のコピーであると、自分ではつきり言っているところはある意味で立派ですよ。それでも非難する人はいたけれどね。あのころ英国では日本よりせりふのスピードがかなり速かった。それを取り入れて当時の観客にショックを与えたんですね」

山崎 「それまでの日本の俳優というのは、飛躍するのに助走が必要だったんです。滑走路が長かった。それを福田さんがぶった切ったんですね。飛躍と省略が、それまでの情動的な演劇をぶつこわしたんです。だからコピーでも、その価値はあったんでしょね」

丸谷 「なるほど、単なるスピードじゃなく、演劇性と一致していたからよかったんです

ね。なまじつか福田バージョンにしないで、コピーしてくれたからよかったんだ(笑)」山崎「スピードだけでいえば、今、芥川さんのハムレットのテープを聞いてみると、ずいぶん遅いですよ。今はみんなこの倍くらいのスピードでしゃべってますから」

話題は芥川比呂志の酒グセのことに移る。

丸谷「芥川さんが『決められた以外のせりふ』で日本エッセイスト・クラブ賞をもらったとき……あれは本当にいい随筆集で、最近ぼくは彼のエッセイのアンソロジーを作つて、本の題名を『ハムレット役者』としたんですけどね。それでエッセイスト賞。当時の劇団雲主催のお祝いの会にぼくは招かれてね。すると初めのうちは彼はとてもおだやかだったけど、だんだん酒が回ってきたら、すぐ近くに座った杉裕之君のことを大声で話題にするんですよ」

山崎「杉狂児の息子ですね。彼は喜劇俳優が父であることに非常にコンプレックスを持

ってましたからね」

丸谷「そうでしょう。それを承知の上でわざと大声で放散放吟する。杉狂児が出てくる何とかいう映画の主題歌。へあなたと呼べばあなたと答える、山のこだまの嬉しさよ(笑)。芥川さんは父親(龍之介)のことで悩んだことはいくらうからね。杉裕之は聞えないふりをしてたけど、あれは気の毒だった」

山崎「困った人です(笑)。頭がいいから人が一番いやがることを茶化して、弱点を突く。その読みが鋭いんですよ。福田さんと並び立つわけがないんです」

昭和三十八年一月、総勢二十九名の文学座員が突然脱退する分裂事件が起きる。山崎さんは入座してまだ四年だったが、芥川さんに従って劇団雲に参加した。

山崎「今はもうほとんどの関係者が亡くなつてますから言っておきますが、あの主謀者は芥川さんじゃなかったと思いますよ。福田



アカデミー外国語映画賞を受賞した「おくりびと」の山崎努さん。 ©2008映画「おくりびと」製作委員会

さんは前の年あたりから『ジュリアス・シーザー』のブルータス役に小池朝雄さんを抜擢したりしているんです」

『ジュリアス・シーザー』は昭和三十四年九月、都市センターホールで観た。

配役は北村和夫のシーザー、仲谷昇のアントーニアス、キャシアスが芥川。市民や兵士たちの中にも山崎さんの名が見あたらないのは、そのころ『大学の山賊たち』で映画『デヴィー』して以来、映像の仕事が増えていたせいかな。丸谷「中村真一郎さんから聞いた話だと、分裂騒ぎの直前、芥川さんは胸の病気で慶応に入院していて、手術室に入るベッドのそば

にずっと小池朝雄がつききりで、一緒にやっ
てくださいますね、いいですね、って迫って
たというんですね。ろくすっぽ考える暇もな
いのにああなって、あんな苦しいことはな
かった、のちに芥川さんが中村さんに語った
という話です」

山崎 「積極的に動いたのは福田さんと小池
さんだったと思いますよ（小池さんはその時
の筋を通して最後まで福田さんから離れな
かった）。その年に劇団雲の旗上げ公演がある
んですが、それに出なかったのは芥川さんと
ぼくの二人なんです。芥川さんは病気で、ぼ
くは三船さんと映画の仕事をしてましたか
ら。翌年、芥川さんから年賀状をもらったら、
句のようなものが書いてあって、去年のこと
を思えば今年は明るい正月だ、といったふう
な意味でした。ぼくはこれ病気がよくなった
ことかと思っただんですが、去年正月、文学座
の仲間を裏切った形になったことへの後悔、
心の痛みを言ってるんじゃないか、と最近考

えるようになりました」

山崎さんは劇団雲に十二年間在籍し、昭和
五十年にフリーになる。芥川は最も買って
いた後輩が離れて行くのを、なかなか許そうと
しなかったらしい。

山崎 「劇団内部のいろいろにいや気がさし
たんです。もっと自由な人間関係でいたい。
でも芝居をするためには、定期的に人に会っ
てないといけないから、それで草野球の『遊
人』というチームを作ったわけなんです」
丸谷 「しかし芥川さんは、ずいぶん引き留
めたでしょう」

山崎 「ええ、目黒の東が丘のお宅へ説明に
長いこと通いました。どうしても納得してく
れなくて、しまいにエサをまくんです」

丸谷 「エサを。どんな？」

山崎 「ハムレットをやらせるから、とか」

丸谷 「ハハハハ。彼の一番大事なもので釣
ろうとしたんだ。よっぽど手離したくなかつ
たんでしょうね」

(つづく)

六方^{ろっぽう}におのおの恒河沙^{ごうがしゃ}の仏^{ぶつ}ましまして、広長^{こうじょう}の舌相^{ぜつさう}を出して、あまねく三千大千世界^{しよくせんじやく}におおいて、みなおなじくこの事をまことなりと証誠^{しょうじやう}し給えり。善導^{ぜんどう}これを釈^{しやく}しての給わく、もしこの証によりて生るる事をえずば、六方の諸仏^{しよぶつ}ののべ給える舌、口よりいでおわりてのち、ついに口に返りいらずして、自然にやぶれみだれんと給えり。

(登山状)

〔阿弥陀經〕では「あらゆる世界にまします数限りないみ仏方が皆、その広く長い舌をお出しになつて、全世界に余すところなくお示しになり、この念仏往生の教えが真実であると証明されています。善導大師はこのことを解釈されて「このように証明されているにもかかわらず、もし往生できないのであれば、あらゆる世界にましますみ仏が出される舌は、口から出し終えるや、ついに口に返ることなく、おのずと破れ散ってしまうであろう」と仰いました。

言葉の重み—み仏と凡夫と—

「飲んだのとたしなむのは意味が違う。飲んだのを『ごっくん』ということであれば、『ごっくん』はしていない」

ご存じのように、主要七カ国財務相・中央銀行総裁会議（G7）後の朦朧とした記者会見でのやりとりを野党議員に追求された際の某議員の国会答弁です。もし、この答弁が晩秋の頃ならば、間違はなく、今年の流行語大賞にノミネートされる程のインパクトでありました。某議員は、朦朧会見の原因を普段より多めに飲んだ風邪薬のためだと主張していました。その後、会見前後の大臣の振る舞い、とりわけ、会見直後に訪れたバチカン美術館で、触ることが禁止されている美術品を素手で触ったり、柵を乗り越えて彫刻の台座に座り警報を鳴らす騒ぎを起こしていたこと、さらには、これまでの某議員による一度や二度ではない飲酒にまつわる問題行動等が、マスコミを通じて次々と報道されるに及び、結果として、記者会見での責任をとって某議員は大臣辞職に追い込まれました。無論、一連の発言の真偽は、結局のところご本人にしか分かりません。まったくの濡れ衣かも知れないのです。しかし、某議員自身のこれまでの行動の積み重ねは、私たちをして記者会見をめぐる一連の発言を限りなく黒に近い灰色に思わせるには充分でした。あらためて、私たちが口にする言葉の重みと

日頃の行動への責任を感じさせられました。

昔から「口は禍の元」と言います。それこそ世間を見渡してみると、大人になればあまり取っ組み合いのケンカはしないもので、世の中の不祥事やいざこざの原因の多くは「口」が発生源のようです。お釈迦さまも、その辺りの消息をよくご存じで、口に関する戒めを多くお示しです。例えば、お釈迦さまが身体と口（言葉）と心をめぐる戒めを説かれた「十悪」のうち、もっとも多いのが口にまつわる次の四つの戒めです。まずは妄語、嘘をついてはいけないということ。二つ目が両舌、あっちではこういうことを言い、こっちでは別のことを言っている、いわゆる二枚舌です。三つ目は悪口、人のことを悪く言う、まさに悪口です。四つ目は綺語、おべんちゃら、ごますりです。これら四つが、不祥事を招き、人間関係をややこしくし、いざこざを引き起こし、あるいは、相手の心を深く傷つけてしまうのです。

私たちは、お釈迦さまの戒めを念頭に、相手の気持ちを慮って、何気ない日常の言葉にも気を配るよう心がけなければなりません。もちろん、言葉と行動とは表裏の関係ですから、正しい言葉は必然的に正しい行動を促し、規定づけるものです。そんな私たち自身の正しい言葉と行動の積み重ねが、周囲の方々

からの信用を得、その人の信頼へと結びつくこととなるです。

とはいえ、そこが煩惱を断ち切れない人間——凡夫^{ぼんぶ}——の愚かしさです。それこそ、この四つの戒めをすべて遵守しなければいけないような事態になれば、サラリーマンが仕事帰りに立ち寄る赤提灯は開店休業になってしまいうでしようし、奥さま方の井戸端会議や茶飲み話もすっかり座がしらけてしまいうかもしれません。かくいう私自身、それこそ日に何度となく、不用意にした言葉が相手の心を傷つけていなかったらどうかと自身を呵責^{かしやく}し、懺悔する毎日です。

法然上人は、そんな凡夫の言葉のありようを十二分にご存じでした。だからこそ法然上人は、冒頭のご法語をお示しになり、決して揺れ動いたり、嘘偽りなどのない、み仏による証明を通じて、お念仏による浄土往生の真実をお伝えになろうとされたのです。それも、お一人やお二人ではなく、あらゆる世界にまします数限りないみ仏方が、この上ないお念仏の尊い功德をこぞって証明してくださっているのです。いったい誰が「それでも私は信じない」と言い張ることなどできるでしょうか。いや、ともすると、自信ありげに「自分自身を客観的に見ることができる」などとうそぶける方々は、こう言い募るのかも知れません。「あなたとは違うんです！」と。

合掌

(林田康順)

「和」の朝めしは“友”が楽しい

「朝・昼・晩の三食のうち、朝めしが一番うまい。なぜなら食間がもつとも長いからだ」

——という朝めしに関する“名言”を前回紹介しましたが、ほかが好きな名言がもう一つあります。

「酒の肴は朝めしのお菜と同じ」

国文学者にして民俗学者、ついでに言っておけば生家は銀座の有名な天麴羅屋さんだった池田弥三郎さんの言葉だそうで、ほかは二十代の時に読んだ山口瞳さんの『酒呑みの自己弁護』でこの“名言”を知り、なるほどと思い、以降、朝めしといえはこの言葉がいつも浮かんできます。

拙著『朝めしのお菜』（アスキー新書）では、この「朝めしのお菜」を「めし・味噌汁・漬物の基本三点セット」に加わる「朝めしの友」と呼んでいます。果たして人はどのような朝めしの友を好んでいるのか、この本の元になった雑誌の連載コラムを始めるにあたって、友人・知人——下は当時二〇代の女子大生から上は五〇代のオッサンまで四十余人にパソコンから勝手にメールを送

りつけてアンケートを実施しました（本では割愛しています）。

いくつ挙げてもし、つまり複数回答としたので、まあいろいろ出ました。多かった順に並べると、

納豆、塩鮭、海苔、玉子（生玉子・目玉焼き・玉子焼き）、たらこ、干物（アジ・若狭カレイ・シシャモ・みりん干し・めざし）、梅干、佃煮（海苔、しぐれ、伽羅蒟、小魚）、しらすおろし、おひたし、ひじき煮、ちりめん山椒、塩昆布と、やはり定番の“友”が上位にきます。

以下は一点ずつで、

カマボコ、きんぴら（ゴボウ、レンコン、ピーマンとニンジン）、きんぴら玉子入り……どんなきんぴらだろう？、煮豆、長ネギ入りの炒り卵（池波正太郎『鬼平犯科帳』のファンであることがわかる）、おきゅうと（そうか、彼は福岡出身だったか）、小ナスの一夜漬（富山出身だそうです）、水ナスのぬか漬（大阪のものだといふのです）、大根おろし、切り干し大根煮、キビナゴの

煮たもの、ジャコ、からし高菜、ゆで卵、前夜の晩飯の残り（たとえば鍋物類、とあった）

……これらを眺めていて思い浮かぶのは、朝めしの友は楽しい、ということでした。

書き連ねているだけで口中に唾液があふれてくるし、これが全品並んだらいたい何膳ごはんを食べてしまうのだろうと思ってしまう。しかも池田さんの言うごとく、どれも酒のアテ（肴）になり、ほくもそうですが、酒飲みにとつては酒を楽しくしてくれるものばかりだから、どれぐらい飲んでしまふだろうと思わずにいられない（笑）。

前回紹介したように、『粗食のすすめ』の著者・幕内秀夫さんは、

「ごはん・味噌汁・漬物の組み合わせは日本人の食の『基本食』です。（略）この組み合わせだけで、食の七割がまかなえるほどのすばらしいものなのです」（『幕内秀夫のがんを防ぐ基本食』筑摩書房）

と言っていますが、それだけではなく、納豆から「前夜の晩飯の残り」まで、言われてみれば定番

ながら、人によってバラエティに富んだ「朝めしの友」は「楽しい」というひと言に尽きると思います。

この幕内さんは、がんの医療に西洋医学だけでなく中国医学などの伝統医療をはじめさまざまな代替療法（西洋医学以外の療法）を取り入れ、組み合わせアプローチしていることで知られる帯津良一先生の埼玉・川越市にある帯津三敬病院で、がん患者さんの食事指導に当たっています。もちろん薦めているのは「ごはん・味噌汁・漬物」を基本とする食事です。

そこで、ほくは帯津先生に、拙著の帯（業界では「腰巻き」とも言います）に推薦文をお願いしたところ、次のような一文をいただきました。

（「ごはん、味噌汁、漬物」を基本とした食事は、がんの患者さんにも勧めています。この「朝めし」には「希望」があります。）

アナタの「朝めし」には「希望」がありますか？

第二十五回

江戸を歩く

運河の町



森清鑑

大江戸ウォーカ―



駿河台へ

筋違御門前の八辻原（八つ小路）西口に架かる昌平橋を右に見て淡路坂を登る。眼下に神田川が流れ、切り立つ眺望の美しさは正に茗溪の感。川の対岸右上には聖堂の練り堀が連なっている。その先は昌平坂学問所である。練り堀に沿った坂道を結構多くの人々が往来している。この道に面して御成門があり、これは聖堂を創設した五代綱吉以下歴代の將軍の通用門である。淡路坂を登ると稲荷小路。これらの景色が一望できる。長谷川雪旦はこの情景を見事に捉えている。

稲荷小路の稲荷とは太田姫稲荷のことである。家康が江戸入府以前、太田道灌が娘姫君の重病治療祈願のために当時の江戸城内に祀る。無事、病氣全快。しかも「この城の鬼門を守る」との御神託を授かる。そこで家康は太田姫稲荷を西の丸鬼門封じに神田川沿いに移した（慶応二年の火災後、駿河台三丁目に

遷座)。掘削された神田川は外堀の役割を果たしていたからである。

大田南畝

この絶景の地に居を構えていたのが大田南畝(他にペンネーム、蜀山人、四方朱良など)(二七四九―一八二三)である。彼は、下級武士ながら幕臣にして江戸中期を代表する文人、狂歌師。狂歌、漢詩文、戯作、日記・紀行、随筆など多彩な分野で膨大な書を残している。十九歳の時、著した「寝惚先生文集」は江戸の狂歌ブームを生み出したヒット作。序文は平賀源内が書いた。昼は謹厳実直な下級武士、夜は一転して文人生活。時は田沼意次の自由な時代。彼は書きに書いた。ところが田沼の失脚と共に松平定信の「寛政の改革」が始まる。文人には厳しい冬の時代が訪れる。戯作者、山東京伝が手鎖の刑に処せられる。南畝も筆を折ることになる。この時の風刺狂歌。「世の中にかほど煩きものはなし ぶん

ぶというて夜も眠れず」。昌平坂学問所入門。なんと四十六歳の白髪頭にして幕府人材登用試験、学問吟味を首席でとおる。その後、支配勘定方に昇進、大阪や長崎奉行所などの出役を務めるなど有能な幕吏。晩年の十二年を大田姫稲荷鳥居前に住む(聖橋南口右、日立製作所)。学問所の遠景を望み、茗溪の谷、神田川の眺望を満喫しつつ、当時としては長生きな七十五歳の生涯を閉じる。辞世の句「生き過ぎて 七十五年食いつぶし 限りしられぬ天地の恩」。反骨の人にして、やることはやり、人生を謳歌した一生であった。

太田姫稲荷を右に見て少し行くと武家屋敷にぶつかる。塀に沿って道は南に折れる(丸善の東通り、池田坂方面)。駿河台である。駿河から家康に従って江戸に入った武家が参集したところからついた名。神田川の昌平橋から飯田橋にかけて、南側一帯は旗本などの武家屋敷がひしめいている。二つ目を右に曲がると雁木坂。緩やかな坂を下ると神田川か



◆「江戸名所図会」 淡路坂、稲荷小路からの聖堂、学問所の光景。絵の下に深く掘り下げられた神田川が流れる。

らの道に出る（お茶の水駅から明大通り）。その左角が御小納戸係、永田与左衛門の屋敷（杏雲堂病院、明大大学院前）で、江戸初期には大久保彦左衛門の屋敷であった。一心太助が日本橋魚河岸から「てえへんだ、てえへんだ」と駆け込んだ屋敷である。この屋敷の南に隣接して御書院番、小栗又一の屋敷がある（九百七十坪、現Y M C A会館）。

小栗上野介

小栗上野介忠順^{ただまさ}。小栗家は正に三河以来の譜代の家臣で、先祖は数々の戦で「またも一番槍」の手柄を立て、家康から「又一」の名を賜る。以降、代々の当主が又一を継承。幼き頃から俊秀の声高く、文字通り、幕末の徳川を支えたばかりか、この人の目は近代国家日本を見据えていた。小栗と勝海舟は幕末の混乱期に具体的なビジョンを示し、かつ実行した傑出した人物に他ならない。二人に共通しているのは無私の精神である。出処進退も

よく似ている。小栗は勘定奉行、海軍奉行、陸軍奉行などの要職を繰り返し、幕府終焉までの僅かな期間に画期的な事項を提唱し、実行している。多くはあまりにも急激な変貌の渦中にあつて存命中にこそ実現していないが、明治政府に引き継がれ、近代国家日本の礎になっている。ガス灯設置、郡県制度、森林保護、江戸―横浜間の鉄道建設、新聞発行、郵便制度創設などの提唱、金札発行など金融経済の立て直し。着手したものに鉄鉱山の開発、日本最初の株式会社組織「兵庫商社」の設立などがある。しかし、なんといっても最大の功績は、横須賀造船所を立案し、その建設にこぎつけたことである。万延元年（一八六〇）、遣米使節としてアメリカ軍艦ポウハタン号に乗り組み、太平洋を横断（この時、威臨丸は随行艦であった）。サンフランシスコからパナマへ。パナマ鉄道建設が株式会社によって成立している事実を知り、慶応三年の兵庫商社設立のヒントを得る。そして一行

はワシントンに赴き、ブキヤナン十五代大統領に謁見、日米修好通商条約批准書を渡す。そこでワシントン海軍造船所を見学。この時の米人との記念写真。小栗は前列左から五人目。眼光鋭い（江戸で小栗を見た子供が泣いた、と小栗はこの子を見る目があると笑ったという）。そこは単なる造船所の施設ではなかった。鉄を溶かし、蒸気機関や齒車など各種の部品を造り、造船の他に大砲、小銃、砲弾、彈丸も製造する総合工場。これが横須賀造船所建設の骨子である。小栗はネジをもらい記念とする。フィラデルフィア造幣局ではドルと小判の金分析実験を行い、通商交換比率の不公平を指摘。米人を驚かせる。その後、ニューヨークから最新鋭の軍艦ナイヤガラ号で大西洋を横断し、アフリカ沿岸を南下、ケープタウンを回りインドネシア、香港経由で帰国。九ヶ月の旅であった。

帰国すると、状況は一変。井伊直弼は暗殺されており、攘夷の嵐が待ち受けていた。勘

定奉行に就任。造船所建設の提案。フランス人技師の測量により横須賀に決定。慶応元年着工にこぎつける。当初は横須賀製鉄所。明治二年に総合的な基礎工場が完成し、明治四年から本格的な造船を開始する。この工事はフランス人技師長ヴェルニーの指揮で行われたが彼の高度な技術と的確な指揮、誠実な運営には驚かされる。造船所の絵図を見ると、単なる造船所ではなく、日本近代工学の発祥であることが判る。製網所とあるのは、工業ロープ製造工場である。製帆所は、帆や天幕を縫う裁縫所である。造船小屋、建築課、電気燈。鑄造所、旋盤所、組立所。ネジ、釘を初め工具、部品の鍛造、製造所。構内は馬車鉄道。造船技術学校、機関学校は東大工学部に匹敵する工業学校。鍊鉄所ではスチームハンマー八基が部品を造る。慶応三年に着工した三ドックは床も壁も石積み。造船所建設の最初に設置されたのが輸入器具、部品を陸揚げする三十トンクレーン。工場では煉瓦も製

造されている。電信局もある。総合技術の発祥であり、ここで学んだ人々が後年、大事業を興していく。当初フランス語がわからないので、小栗は日本最初のフランス語学校を横浜に創ってしまった。こうして三十数戸の寒村が横須賀市に発展した。ドッグなど多くは現在も使われている。スチームハンマーは一九九〇年代まで使われた。正に工具や部品を造るマザーマシンである。

幕府倒壊。明治政府がこの事業を進めていく。造船所から海軍工廠へと名称が変わる。罷免された小栗は、駿河台の屋敷から領地の群馬郡権田村に引き上げ、ここで悲劇的な最後を迎える。明治は進み、日本海海戦に勝利した東郷平八郎は小栗の遺族を探し、勝てたのは全く小栗さんのお陰であると感謝している。姻戚筋にあたる大熊重信は小栗の意志を継いで鉄道敷設に貢献していく。小栗は造船所完成を見ることなくこの世を去ったが「これが出来上がれば、土蔵付き売家の榮譽が残

せる」と笑ったという。徳川幕府が倒れても次世代政府のためになるということである。理不尽な悲劇は彼を突然襲った。しかし、日誌によると、斬首の前日まで権田村の水路開発のために尽力していたのである。

駿河台富士

小栗屋敷前の坂道を再び北に登り、神田川溪谷に出る（ちょうどそこは現代のＪＲお茶の水駅改札口前の広場で、江戸期には、お茶の水橋はない。駅もレールも当時は河川敷、土手）。ここで道は西に屈折する。この小袋町の道の左側はお堀までなだらかに下る。駿河台。旗本屋敷が連なる。少し歩くと皂角坂（さいかくざか）に登りつつ右手眼下に神田川に架かる上水の懸樋（かけ）を垣間見る。この坂からお城、駿河台武家屋敷方面を見ると絶景である。ここから拝見する富士はまた見事。広重も北斎も富嶽三十六景で描いている。広重の「東都駿河台」は、皂角坂から見ると、めずらしい光景。坂を二人



◆広重不二三十六景「東都駿河台」

の旅人が歩いてゐる。駿河台から登ってくる人も見える。眼下に旗本屋敷が連なる。中央右手に江戸城。富士は左に描かれているが、これは広重独特の工夫された画面構成。この方角からはむしろお城の方に富士があるはずである。松の木がシンボライズされている。皂角坂とは周囲にサイカチの木（鋭い棘がある）が群生していたことからその名が付いた。後に松の木が植えられ、かような景観となった。坂の左下に石垣が描かれている。この石垣は、人工の神田川溪谷に連なる。それにしても広重は見事に当時の情景を捉えている。江戸の人々がこの坂から駿河台富士を見れば、正にこの絵の印象であつたに相違ない。続いて北斎の三十六景「東都駿台」である。北斎は神田川北の本郷台方面から富士を描いた。溪谷沿いの昌平坂学問所（東京医科歯科大学）を経てお茶の水坂から駿河台を眺めている。左下に坂を下る家来を連れた武士。荷物を背に登ってくる商人。天秤棒を担いで下

る人。そこにちよつと顔を出しているのが神田川である。すると右手に描かれている建物の裏に上水の懸樋と水道橋が見えたはずだ。中央の石垣が見える土手が皂角坂である。その右上に駿河台の武家屋敷の屋根。そして富士がさりげなく描かれている。坂道の土手を歩く三人は、道の川沿いの土手を歩くことができたことを示している。彼らは一段高い処からの眺望を得たかったのであろう。江戸城の外堀を兼ねて削られ、できた人工の神田川溪谷と、この高台から目線で見える富士の美しさ。いつしか江戸の名所になった、現代人には想像もつかぬ光景である。

皂角坂を越すとすぐに水道橋、そして三崎稲荷がある。神田三崎町の語源ともなった、この稲荷の当時の情景は長谷川雪旦が正確に描いている。社の前の道がこれまで歩いてきた道。ここに来ると道幅は幾分広くなり、馬に乗った武士が家来を連れている。御婦人、子供連れの武家の姿もある。参詣客に侍が多



◆北斎富士三十六景「東都駿台」

い。それもその筈、この稲荷は大名すらも登城前にここで身を清めたという由緒ある処。「清めの稲荷」として有名であった。創建は建久以前。北条氏綱が千代田城に居たときには厚く尊崇。社殿を造営。家康も同様。家光も度々参詣している。神田川掘削工事の責任者、伊達綱宗は当初度々崩壊した堤防工事の無事完成を祈願。完遂に成功する。いわば神田堀の守り神である。雪旦の絵の後ろに神田川が流れ、その右手に水道橋が架かっていた（維新後、三崎稲荷はJR水道橋駅南側に移転）。

三崎稲荷を過ぎると、前方に小石川御門が見える。道の左側南側に延びている一画が講武所である（神田小川町台町、現三崎町二丁目）。敷地一万三千坪。異国の脅威など軍備の立ち後れを痛感した幕府は本格的な武術訓練機関を創設。教科の範囲は剣術、柔術、弓術、槍術から砲術にまで及ぶ。主に旗本、御家人を対象に鍛え直そうというわけである。

安政三年（一八五六）講武場として築地に発足。ここが軍艦操練所になったため、文久元年（一八六一）この神田小川町に新設、その名も講武所に改められた。そして慶応二年末（一八六六）に廃止されている。明治維新という大変革期までの極めて短い期間ではあったが大いに若侍らの武を練った。指導者は錚々たる人物である。剣術で言えば師範役筆頭に天下の剣客、男谷精一郎（勝海舟の従兄弟）、榎原健吉（男谷の弟子）、伊庭軍兵衛、桃井春蔵など。槍術は幕末の三舟といわれた高橋泥舟、砲術では高島秋帆、勝海舟、大村益次郎。この幕府最後の軍政改革の場も維新後は練兵場となり、明治中期からは一転して三崎座、川上座（川上音次郎）、東京座など演劇の町と化していく。

【参考文献】

「北斎、広重富嶽三十六景筆くらべ」人文社
新版「江戸名所図会」角川書店
他



◆「江戸名所図会」三崎稲荷社

浄土誌上句会

浄土の歌壇

●焚火

〔特選〕玉砂利や大焚火跡まだ温し

井村 善也

玉砂利と大焚き火の組み合わせといえは、左義長を思い浮かべる人が多かろうが、そこは読み手の自由に任されている。参詣に来ると境内の焚き火はすでに納まっていて、その温みがふつと頬をなでた。

〔佳作〕とつぷりと暮れて焚火の人ひとり

横山百合子

境内の焚火しづかに雪催

安西 弓彦

流水を集めて焚火漁談義

斉藤 幸雄

●時雨

〔特選〕マラソンの最後の走者時雨雲

池田 伊吹

時雨雲が垂れこめていていつ降り出すか分からない。二時間以上もかかる競技が心配である。歩道に立っていると最後の走者の姿が

見えてきた。この分では走者も、そして自分も降られなくて済むかも知れない。

〈佳作〉

夕時雨手提かざして急ぎけり

金谷 友江

登山口の赤き鳥居や初時雨

石原 新

小走りに路地行く猫や夕時雨

西井 正

●自由題

〈特選〉

孫ら来て雑魚寝続きの三ヶ日

浜口 佳春

正月は帰ってくる身内でてんやわんやである。それだけでも大変なのに、孫たちはおじいちゃんに付きまとう。夜は先を争って蒲団にもぐり込んでくる。三ヶ日というものは毎日こういう状態なのである。

〈佳作〉

黙読の般若心経今朝の春

安西 弓彦

髪切って七日の風の新しい

山口 信子

手土産に母の好みの桜餅

下村 長市



浄土誌上句会のお知らせ

兼題
季語ではありません

雨坂自由題

誌上句会〈編集部選〉

■焚火

落ち葉焚き方丈さまも加われり
焚火して芋焼く日々も遠のけり
煌々と夜焚火鐘に燃え立てり
あつけなく焚火に燃えしかの手紙
浜焚火跡形もなく波消しぬ
浜焚火煙縦横逃げまどう
焚火から駆け出す少年塾通い

金谷友江
佐藤雅子
工藤浄真
中島富士子
浜口佳春
石原 新
増田信子

締切・二〇〇九年三月二十日

発表・『浄土』二〇〇九年五月号

選者・増田河郎子（『南風』主宰）

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

■時雨

時雨雲去りて日射の陶器市
急逝の柩出てゆく時雨中
時雨るるも海の明るき漁の船
稲荷社の大樹に寄りて時雨かな
釣宿に時雨魚拓を褒める間に
てのひらの小石に落ちる時雨かな
大櫓から駅までの夕時雨
対岸は明るきままに時雨れけり
時雨来て走るとの子も器量良し
肘の影鉛筆の影時雨つつ

中島富士子
佐藤雅子
工藤浄真
内藤隼人
山内 寛
尾崎暢子
景浦篤美
横山百合子
古藤由香里
安西弓彦

■自由題

菊焚きて昼に積もる香りかな
重ね餅とんと見かけぬ嫁が君
幼な子のわけなくはしゃぐ女正月
嘘一つついて寒さの身に沁むる
冬天の朝日に映ゆる利尻富士
釣宿のテレビ裏から隙間風
はんぺんの膨らむ異様一茶の忌
このたびは受話器の底に除夜の鐘
まはる火の鱈ちりちりとつつと
髪切って七日の風の新しき

當麻アサ子
佐藤雅子
金谷友江
中島富士子
工藤浄真
山内 寛
尼崎暢子
進藤正昭
大越 敦
山口信子

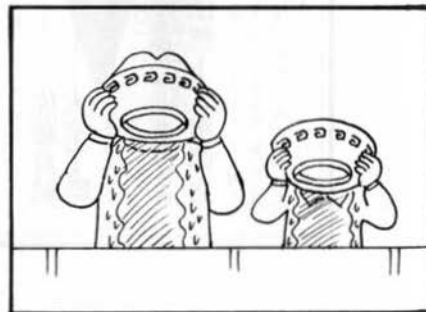
さっちゃんね

59 かい目

かまち♡ひろう



4月1日より、かまちよしろう先生作新聞四コマ漫画『ゴンちゃん』が各地方新聞に掲載されます。(静岡新聞・山梨日々新聞・北日本新聞・福島民報・宮崎日々新聞・新日本海新聞・山形新聞・長崎新聞・岐阜新聞以上朝刊 中国新聞・神戸新聞以上夕刊)



桜咲く言葉なくして見つめ合う 岱潤

人の持ち物の中で、この十年の間で画期的に存在感が出てきた物といえば、携帯電話であろう。三十年前にはその存在すらなかった物が、現在では特定の世代では九割以上の人が所持しているという。その携帯電話に対する調査が先頃行われ、その結果にまたまた驚きを持った。私自身二十年前より所持し、それなりにメールなども使っているが、あくまでも電話機として利用している。しかし調査結果は通話利用の頻度はほとんどなく、その大半がメールのやりとりだそう。そして中・高生の利用回数は一日に

三十回から五十回が最も多く、利用時間帯は午後十時以降に集中し、中には食事中、入浴中もメールをしている子が、二割もいるという。

またもっと驚いたことは、ある学者がメールをしている子の頭に脳波測定器をつけたところ、その子の脳波はメールをしているとき全く動かなかったという。その子はメールの文章を作るのに、頭を使っていないということだ。

この数年で急速に浸透した携帯電話のメールという通信手段は、人間にとってコミュニケーションという最も大事なことを、軽薄な物に変えてしまったようだ。人間が最も集中できる時間帯、また最も

リラックスできるときを、何も思い出せないときにしてしまっているのではないだろうか。文明機器の怖さをまた一つ感じてしまった。(長)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤晃道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

浄土

七十五巻四月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷

平成二十一年三月二十日
平成二十一年四月一日

発行人

編集人

印刷所

〒一〇五〇〇一

東京都港区芝公園四・七・四明照会館内

発行所

法然上人鑽仰会

電話〇三三・五七八・六九四七
FAX〇三三・五七八・七〇三六
振替〇〇一八・〇八・八二八七

雑誌『浄土』
特別・維持・賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
魚尾孝久(三島・願成寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
北山大超(焼津・光心寺)
加藤亮哉(五反田・専修寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
田中光成(町田・養蓮寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓爾(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
真野龍海(芝・天光院)
鮎 博之(網代・教安寺)
水科善隆(長野・寛慶寺)
宮林昭彦(大本山・光明寺)
山田和雄(諏訪・貞松院)
(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://gekkan-jodo.info>

多聞之力

多聞は力なり
無量寿経

生野善應

亜細亜大学講師
東京高輪・光福寺住職

節度ある凝縮した情報こそ人に価値あり。

豊かな情報は知識の充実、商品の販売を高めるために重要ですが、情報の過多は害を齎します。

家庭医学書や医療番組の知識から、つい人は医師の診断を疑い、病院を巡って見立てを比較します。自分の見立てを正当化する診断を望む結果でしょう。素人判断は迷いのもとです。大病院に最近できたセカンド・オピニオン外来科は、情報過

多と関連がないでしょうか。

テレビ放映開始の頃、放映時間に制限がありました。時間を区切った放映はメリットもあります。緊急情報も節度ある連絡こそベター。津波、地震、強風の過度の報道繰り返しは、人に不安を募らせ、逆効果。情報の消化不良は社会に人に害となります。

法然上人鑽仰会の

本

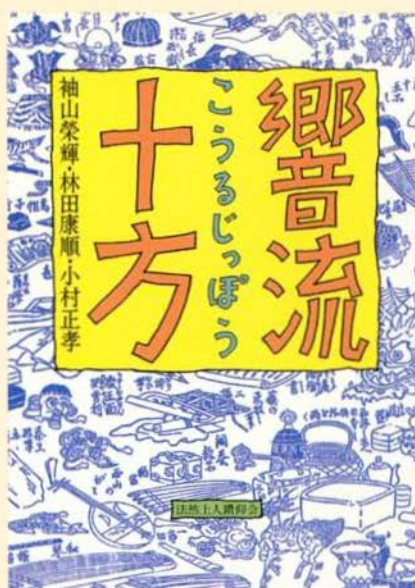
当会発行の書籍、雑誌
のお求めは、当会へ直接
お申し込みください。

なお、月刊『浄土』を除き送料は
含まれておりません。別途実費を
申し受けます。

法然上人鑽仰会

電話／03-3578-6947

FAX／03-3578-7036



響流十方ころるじっぽう

600円(税別)

「差出人は法然さん」

600円

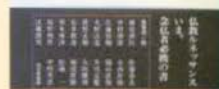


月刊『浄土』 バックナンバー



「念佛讀本」完全復刻版

1,600円



※額装寸法 47×59cm



選擇集十六章之図(額入り)

「選擇集絵解き物語」含む

20,000円 (別途梱抱料300円)



「法然上人絵伝絵葉書」

(8枚セット)800円



※浄土宗大本山増上寺蔵
「法然上人絵伝・残欠二巻本」より